

## 〈講演記録〉

## 考古学からみるシマ

上原 静

(南島文化研究所所員／  
第11・13代南島文化研究所所長)

## I はじめに

「シマ」の概念について、1985年に行われたシマ研究会において、高良倉吉氏が歴史学研究では人々の生活の集団単位として、生活文化の面でも一つのユニットであり、自己完結性が高く、行政的にも基本的な単位として認識されるとした。この指摘を踏まえ考古学から「シマ」をどの様に捉えられるのかを考えてみたい。まず、狩猟採集時代から農耕生産時代までと、時間軸を大きく捉える考古学からみると、先の定義の集団が鮮明に認識されるのはやはり歴史時代という新しい段階にある。しかし、人々の生活集団は歴史時代に入り突然に形成されたものではなく、その以前の先史時代からもその痕跡はあり、当然ながら広く視野に入れる必要がある。つまり、考古学的アプローチは文献史学の領域を超えるところに特徴もある。また、一方で、資料操作の異なる考古学では冒頭で示された「シマ」の捉え方に差異があり、研究領域により、違いを示すものとなろう。あらためて考古学の定義と接近方法をみると、まず、地下から出土する物質資料を通して、過去の社会や生活文化を究明する科学であること、そして生活文化の広がりなどを捉える一つに、一定の遺物や遺跡の特質を空間における平面分布で見だし、それを地理的にみて地域的差異として認識する考え方である。この様な単位を冒頭で示した「シマ」の概念と類するものと理解される。しかし、この考古学資料は見方によっては、極端にいうと、出土遺物や遺跡は子細にみると遺跡ごとに異なり、一つとして同じものはない。ある意味で遺跡の一個一個が究極の地域を語るものでもある。よって、それをまとめあげていく、つまり普遍性（一般化）と特質性という二つの観点にたつ科学的分類が行われるのである。なお、その過程の認識において、その分類の大小枠の差異で、結果として同じ専門領域内においても多様な解釈があることも申し上げておきたい。

## II 考古学にみる地域性

ここでは、今日まで認識されてきた考古学からみた冒頭の「シマ」論に近い、いわゆる地域論について、具体的な研究例を概観しながら話を進めていきたい。内容は先史時代に遡る。人々の生活単位の括りとしては、考古資料の性格上東アジアを含めたグローバルなものから始まり、漸次、時代の変遷とともに列島内に狭い範囲の地域性が認められる、より細分化されていく過程がある。細分された地域の一つが琉球列島でもある。以下に、3項目にしてまとめてみた。

## 1 旧石器時代におけるアジアの中の日本列島の文化圏

地球上における人類の活動は約400万年前に遡るが、日本列島における人類の活動の痕跡は、約4万年前頃からである。その時期の文化的活動には、すでに地域性がみられる。極東ロシア、中国地域から日本を含む地域が、ナイフ形石器や石刃文化の範疇にあり、南に隣接する東南アジア地域には礫器、剥片文化圏が広がる関係にあった。南西諸島はその両分布圏の間に位置し、近年の研究により、奄美諸島以北が北方系に属し、奄美諸島を含む沖縄諸島以南は南方系であることが議論されているまでになっている。北側地域が狩猟に適した刃物類の石器の発達地域であり、南側の熱帯樹林地帯における植物食に対応した石器の違いが示されている。

## 2 新石器時代における日本列島の土器文化

世界に先駆けて日本列島では約1万5000年前から土器が登場する。地球温暖化にともなうように、豆粒文土器、隆線文器、爪形文土器の登場があり、近年では、新顔の土器として、第二の縄文文化としても指摘されている鹿児島県を中心とする貝殻文土器が認められる。これら土器を基準とする新石器時代における琉球列島は、南北二つの土器文化圏を形成している。つまり上記の縄文土器の系譜を有する北琉球圏と、それとは異なる台湾、フィリピンなどを含む南方に系譜を有する南琉球圏の存在である。この南北の土器文化圏はそれぞれの独自の歩みを進めていく。ことに北琉球圏における新石器時代は、縄文時代が前半期、その後の弥生時代相当期を後半期とする。ただしこの後半期の琉球列島には弥生時代は訪れてないはいない。漸次進みつつあった先史文化の地域化が一層展開し、日本本土が弥生時代を形成する段階において、奄美・沖縄諸島では独自の狩猟採集文化が展開している。ここにおいて系統を大きく分かつことになる。他方、南琉球圏においても、南方からあらたな文化の波がよせ、従前の土器文化が終焉し、シャコ貝製貝斧や新石器文化へと、また新たな世界を広げている。

①遺跡の立地と時期の変遷：縄文草期には海岸線に遺跡の分布があるが、その後沖縄本島では縄文後期には内陸へ進出する。ことに河川の沢を利用したことがうかがえる。さらに縄文晩期になる丘陵上面地帯に集落を形成する。次のうるま時代に海岸に再移動し、また、次代のグスクへと生活地の変遷を示す(高宮1982)。

②弥生文化の受容研究：うるま時代(弥生～平安並行時代)における弥生文化の受容動態について、弥生系遺物の時期差に基づき、その種類と量の組成差から、交流の拠点的遺跡の存在と、波及の過程について論じている(新里2001)。

### 3 グスク文化圏の形成

狩猟採集段階にある先史時代まで、南北文化圏はそれぞれ違いが際立っていたが、このグスク時代段階に奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島が共通する文化圏を形成するにいたる。

この文化の開始期はこれまで、12世紀頃と認識されているが、その文化の萌芽段階は、現時点では9世紀まで遡るまでになってきた。学問的な契機は喜界島城久遺跡群の発見からである。9世紀段階における他の島嶼は依然として、狩猟採集社会の中にあり、喜界島の城久遺跡群において、日本本土の古代文化的な生活が経営されていたことになる。北部九州の太宰府の機能を有する拠点的性格の場所として古代学研究から論じられている。現在、絶対年代はやや下り12世紀相当の遺跡ではあるが、城久遺跡群に類似する遺跡の発見があり、漸次、南島全体に浸透していく様相が窺えるまでになっている。

- ①近世集落移動論：表面採集資料による確認遺跡群（集落跡）を、時代的に新旧の系列で並べ変遷したと解する（沖縄文化協会1970、72）。
- ②日本中世文化の伝播研究：遺跡における島外産や舶来のカムイヤキ、石鍋、白磁の組成と量の差異で、島嶼への浸透過程を考察（宮城2015）。
- ③中世相当期の瓦研究：高麗系瓦、大和系瓦の分布の差異にみる東西海岸領域圏を考える（上原2013）。
- ④グスク土器の製作技法研究：土器の混入物の差異にみる分布圏とグスク政治圏の一致を考察する（安里1980）。
- ⑤グスク遺物の組成研究：今帰仁城跡における発掘遺物の組成差異と郭の利用相違を通して、階層の存在と生活圏の違いを復元的に説く（宮城2006）。

### III おわりに

以上、考古学からみる文化伝播にかかる集団や地域に関する研究成果を概観した。およそ考古学で一般的に行われる研究方法の一つである分布論、地域論からみた内容である。

食糧資源の獲得のため、狩猟採集を中心とする活動から、農耕生産、交流交易活動を行い定住へという大きな流れを示した。換言すると人類史という人の環境への適応過程を読み解く研究方向といえる。概して古い段階においては、大きな枠組みで捉えられ、新しい段階に移行するにつれ、地方化、地域化として認識される。

琉球列島も古くから論ぜられているように、地理的、自然的環境を強く受け、北と南に系譜を持ちつつも、幾つもの文化影響を重ね、沖縄の個性を作ってきた流れがみられる。

現時点で、本討論会のテーマの「シマ」は、考古学的には琉球列島における縄文晩期から竪穴住居を中心とする集落を形成することが顕著にみられる。1集落に4棟～6棟を一つの単位として認識される。集落の営まれる立地環境は沖縄本島であれば、中南部の丘陵

地域である。他方、周辺離島の場合はその限りではなく、海岸砂丘地域に展開する傾向がみられる。

今回のテーマである「シマ」の特徴も、ある意味で各時代、時期により変化してきた歴史の積み重ねの結果であることが窺える。つまり、先史時代の移動するシマ（集団）があり、やがて経済、政治、宗教、軍事活動などという社会環境により、また、それぞれのシマを形成したことが解せる。

※今後、分布の差異、移動の背景についての説明が大きな課題。

※遺物の差異が、即文化圏の差異と捉えるのも留意を要する。

### 参考文献

- 高良倉吉「首里王府とシマ（要旨）」一間切・シマ制度から間切・村制度へー『第4回シマ』1985年
- 横山浩一「型式論」『岩波講座日本考古学1 研究方法』1985年
- 戸沢充則「総論—考古学における地域性—」『岩波講座日本考古学 5文化と地域性』1986年
- 藤本 強『石器時代の世界』1980年
- 芹沢長介『考古学ゼミナール』山川出版社、1976年
- 芹沢長介『縄文〈日本陶磁大系1〉』平凡社、1990年
- 小田静夫「旧石器時代と縄文時代の火山災害」『火山灰考古学』古今書院 1993年
- 小田静夫『琉球弧の考古学』南西諸島におけるヒト・モノの交流史 2010年
- 新東晃一「南の縄文世界」もう一つの縄文文化『東北学 Vol. 6』2002年
- 高宮廣衛「暫定編年の第二次修正について」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第11巻 1号 1983年
- 高宮廣衛「暫定編年（沖縄諸島）の第三次修正」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第12巻 1号 1984年
- 高宮廣衛「南島考古雑録（1）」『南島考古』No. 11 1991年
- 高宮廣衛「沖縄先史土器文化の時代名称—「縄文時代」・「うるま時代の可否について」—『南島考古』No. 12 1992年
- 高宮廣衛「沖縄の考古学の現在」『東北学 Vol. 6』2002年新里貴之「物流ネットワークの一側面：南西諸島の弥生系遺物を素材として」『南島考古』第20号 2001年
- 新里貴之「貝塚後期文化と弥生文化」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦（編）『弥生時代の考古学Ⅰ：弥生文化の輪郭』同成社 2009年
- 上原 静『琉球古瓦研究』榕樹書林 2013年 沖縄学生文化協会『郷土 第9号』沖縄大学 1970年
- 沖縄学生文化協会『郷土 第11号』沖縄大学 1972年 宮城弘樹「グスク時代初期における出土滑石からみた集団関係」『南島文化』第38号 2015年

宮城弘樹「グスクと集落の関係について（覚書）—今帰仁城跡を中心として—」『南島考古』第25号 2006年

安里 進「グスク土器の地域色と「くに」・「世」—沖縄本島中・南部を中心に—」『国分直一博士古希記念論集 日本民族文化と周辺 考古編』1980年



図1 仲原遺跡の竪穴住居跡集落跡（縄文時代晩期）

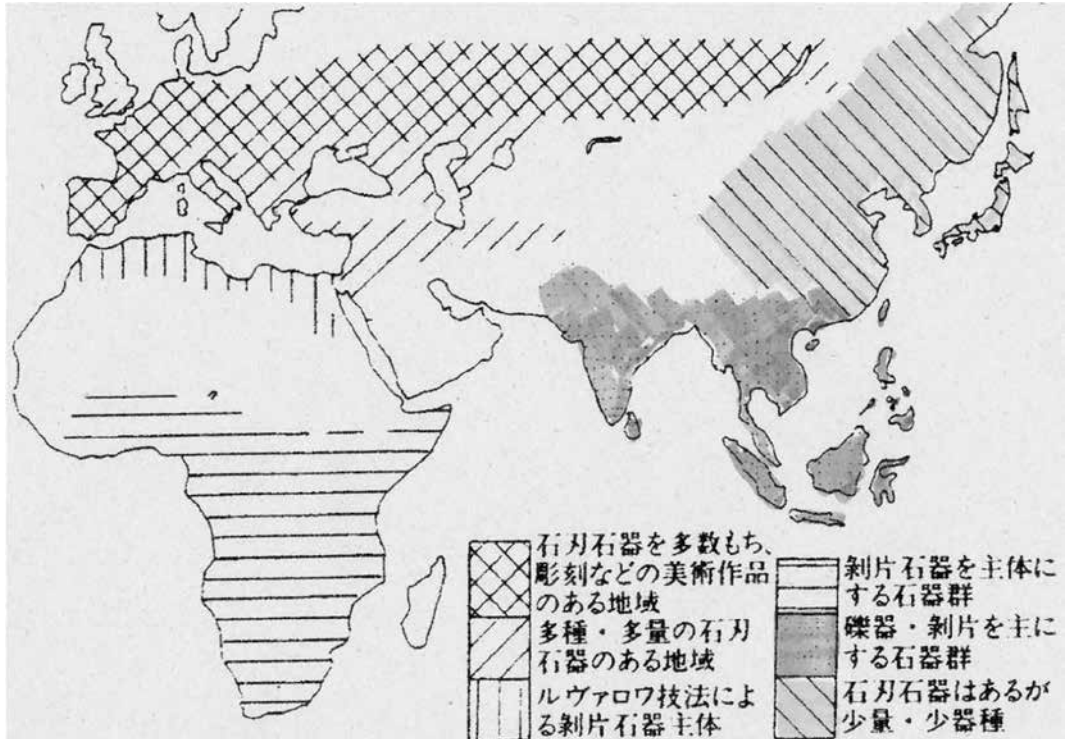


図2 後期旧石器時代の旧世界（藤本強 1980）

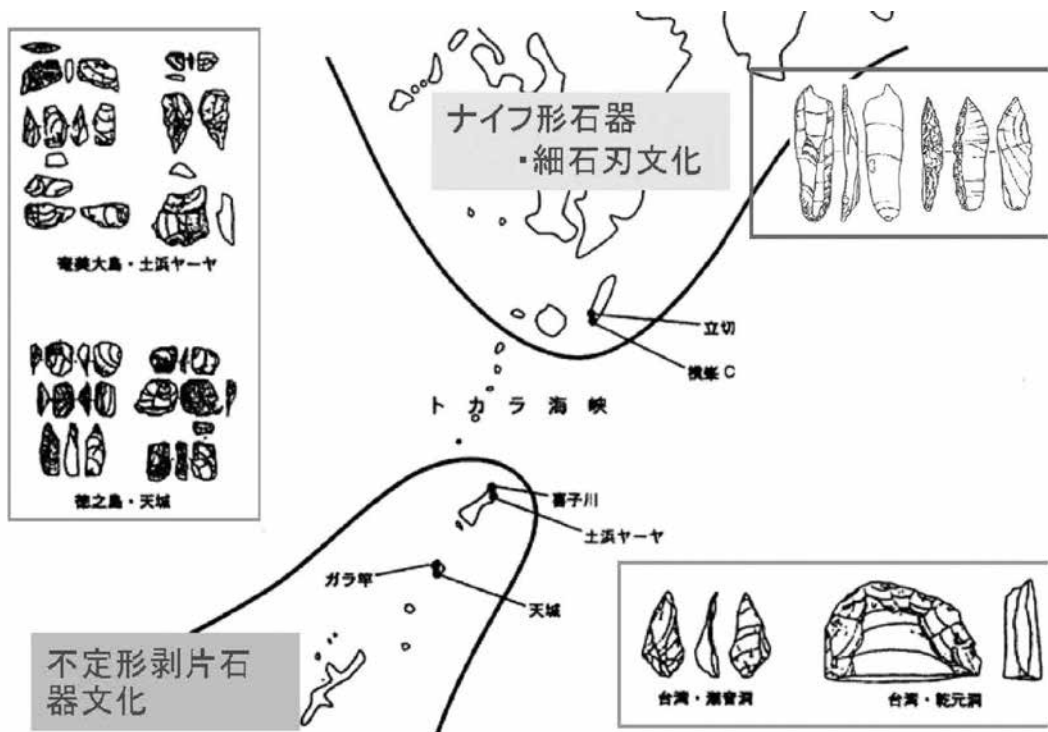


図3 琉球弧を画する二大旧石器文化圏（約3万2,000～1万4,000年前）（小田静夫 2010）



図4 日本の新石器時代（縄文時代草創期・草期）



図5 琉球列島の新石器時代（縄文時代草創期・草期）

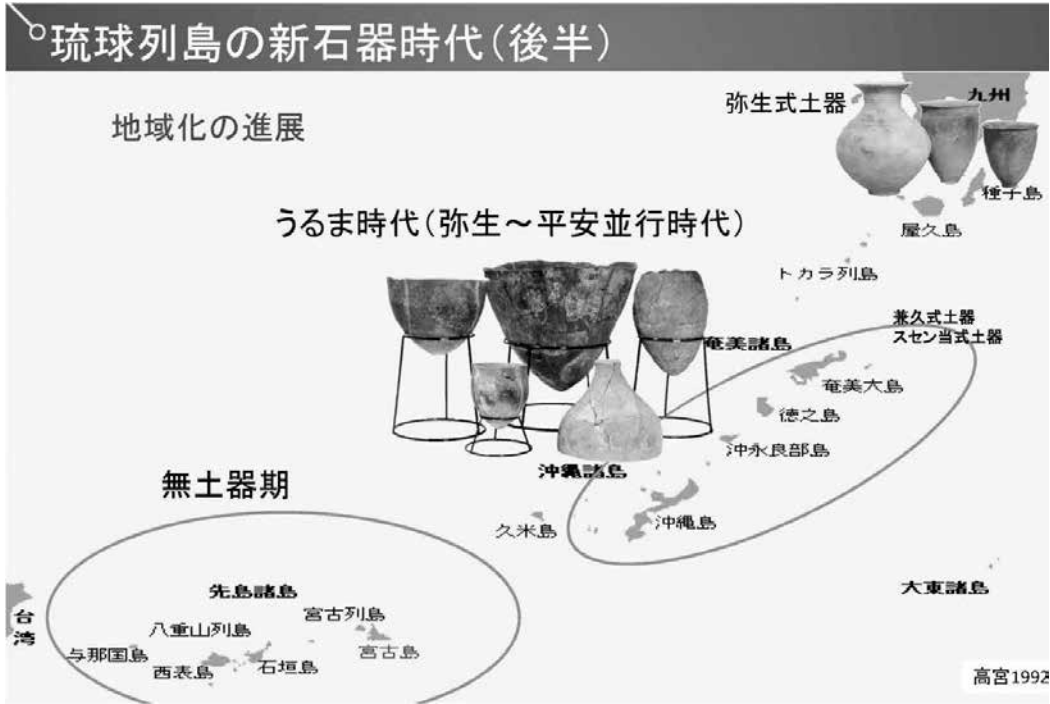


図6 琉球列島の新石器時代(後半)

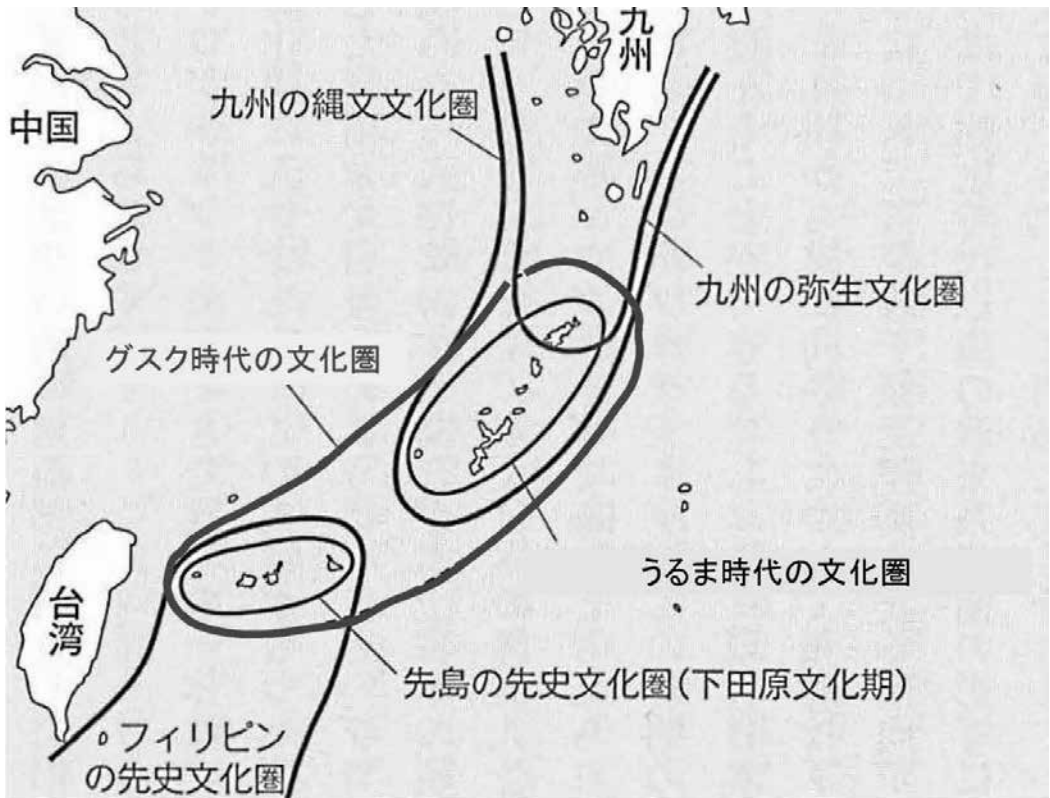


図7 グスク時代



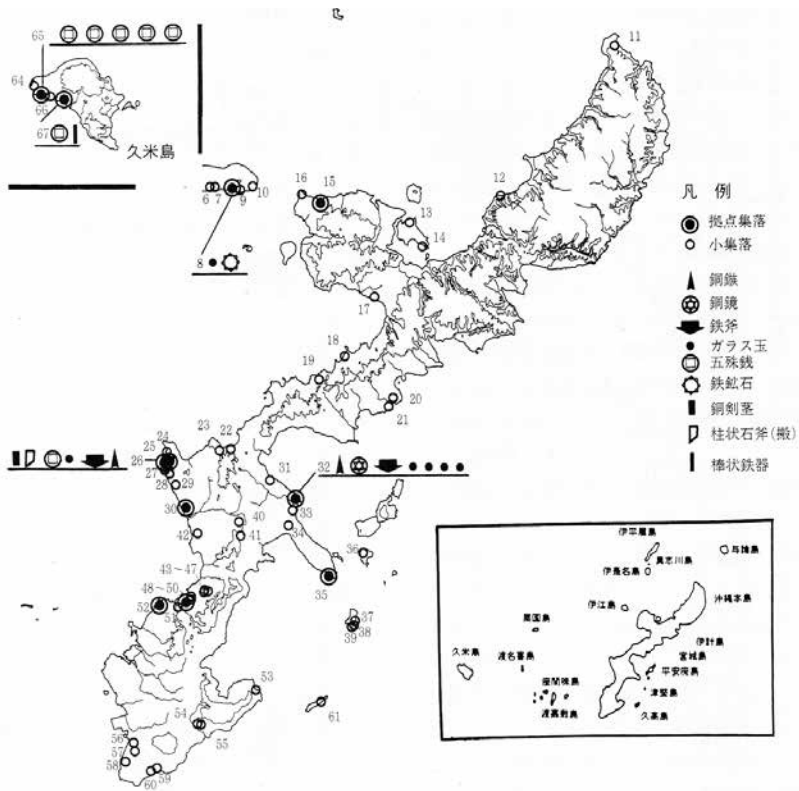


図8 弥生系の遺物 (新里 2001)

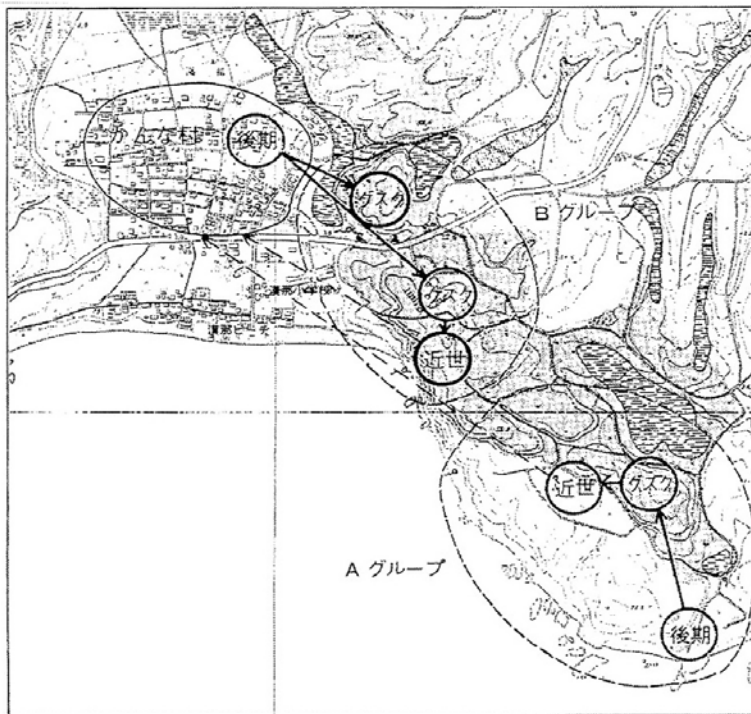


図9 漢那ミーキ原・平松原石灰岩地帯における遺跡の展開 (知花 1991)